

『婦人之友』誌における「家庭生活の合理化」という送り手の戦略の100年

1 問題関心

近年、女性が自発的に社会参加することは珍しくない。また、女性自らが情報発信する『ぴいめ〜る』¹⁾のようなNPOも存在する。これを可能にしたのは、インターネットの普及、NPO法の成立といった情報環境整備と市民参加型の政策である。

一方、近代日本においては、婦人雑誌という女性向けの情報媒体が多数存在していたが、これらは近年相次いで廃刊されている。

女性の社会進出や即時的情報交流が今日ほど発達していなかった当時、女性は雑誌という情報交流の場をどのように利用してきたのであろうか。

2 先行研究の整理と本研究の位置づけ

2-1 先行研究の整理

■婦人雑誌研究

婦人雑誌を俯瞰した研究は、岡や永嶺²⁾によってなされている。とくに明治から大正時代の女性の地位を明らかにするための婦人雑誌研究は、牟田³⁾や小山⁴⁾、前田⁵⁾によってなされている。井上⁷⁾らは、現代雑誌におけるジェンダー論を展開している。

■女性組織研究

上野¹⁾は、近年、女性が作り出した新しいネットワーク「女縁」を、「選択縁」(選べる縁)のひとつと定義づけた。天野¹⁾は戦後発生した主に女性による小集団を調査し、考察している。佐藤¹⁰⁾は生活クラブの階層性・閉鎖性・ジェンダー問題を解析した。

■雑誌の「共同体的受容」¹¹⁾研究

前述の永嶺は、田舎教師の共同体的読書の様子を、佐藤¹²⁾は雑誌『キング』の受容形態を、そして阪本¹³⁾は雑誌『平凡』とその共同体的受容組織「友の会」を研究している。

2-2 本研究の位置づけ

以上から明らかになったのは、ジェンダーの視点以外からの、婦人雑誌の長期に渡る共同体的受容研究が行われていないことである。現存する女性雑誌の共同体的受容組織の研究は、その雑誌の果たしてきた役割を明らかにできるとともに、インターネット出現以前の脱地域的な情報交流システム事例として提示し得るであろう。

3 本研究の目的と方法

3-1 本研究の対象と目的

本研究は、現在も継続発行されている日本最古の婦人雑誌『婦人之友』と、その読者組織『全国友の会』

(以下、『友の会』)を研究対象とする。

本研究の目的は、『婦人之友』誌の記事内容、読者組織の活動、雑誌と読者の関係性の変化を分析することで、組織形成母体としての雑誌の役割と、その継続力を支えた送り手の戦略、とくにこの雑誌における「家庭生活の合理化」という継続的な提唱の意味を明らかにすることである。

3-2 調査方法

本研究は、『婦人之友』の記事内容分析データを中心に、会員へのヒヤリング調査と婦人之友社及び全国友の会発行の創業者著書、周年記念誌等関連書籍のデータにより補完する。

4 研究対象

4-1 羽仁もと子

『婦人之友』誌及び『友の会』の創業者・羽仁もと子は1873(明治6)年青森生まれ。女性初の新聞記者を経て羽仁吉一と結婚、1903年『家庭之友』創刊、1908(明治41)年、誌名を『婦人之友』に変更する。学校法人自由学園を創立した教育家でもある。

4-2 『婦人之友』誌の特色

『婦人之友』誌はA5判、その内容は、主に羽仁もと子の巻頭文、その他座談会、政治・経済、衣食住、子育て、家計、小説、エッセイ、投稿、本・映画紹介、友の会関連記事、自由学園関連記事、編集後記である。

発行部数は、創刊当初が2~3千部、戦前は6~7万部、戦後は12~13万部、そして近年は11万部であることがわかっている。

毎年年末に発行される別冊『羽仁式家計簿』は、他の家計簿と異なり予算をたてるのが特徴的である。

4-3 全国友の会

『友の会』は1930年に成立した『婦人之友』誌読者組織である。東京に中央部が、全国に10の「部」があり、各地に『友の会』が192、それぞれに方面会、同会のさらに下位に最寄会がある。会員数は現在約22,000人である。各地の『友の会』は「友の家」と呼ばれる建物を所有し、家事研究の報告会、会合のほか一般向け講習会も開く。活動費は講習会の参加費等をあてる。

近年会員数の減少や会員の高齢化が問題となっている。その主たる原因は女性の就業率のアップであるが、「考え方は学びたいが、集団活動にはかかわりたくない」という人(=「ひとり友の会」)も多い。

5 『婦人友』誌内容分析

『婦人友』誌内容を、量的・質的に分析した。

5-1 量的分析

分析対象は、1903年～2005年発行の『婦人友』

10月号の主たる構成が文章である、3185記事である。
分析は、内容、形態、テーマ、執筆者のそれぞれの
時代ごとの平均量を出し比較した。時代設定は下記
のとおりである。（結果から読み取れた特徴は後述）

表1 時代区分の設定

No.	期間(西暦)	時代区分の名称	概要
	1903-1926	友の会以前	友の会成立以前
	1927-1941	萌芽期	友の会成立直後の時代
	1942-1945	戦中	第2次世界大戦に起因する非常体制時代
	1946-1956	隆盛前期	高度経済成長とともに順調に成長する時代
	1957-1972	隆盛後期	創立者・羽仁もと子死去直後の時代
	1973-1982	転換前期	環境問題に取り組み始めた直後の時代
	1983-2005	転換後期	「バングラディッシュとの台所交流」が始まった直後の時代

5-2 質的分析

次に下記に示したカテゴリーによって、数量化
類という手法で分析を行なった。

夫婦、洋風提案、キリスト教、悲嘆、第三国、
環境、戦争・平和、農村改良、仕事と女性、合理的、科学、自由学園、多ページ、羽仁トップ

5-3 内容分析結果

内容分析の結果、以下のことが明らかになった。

羽仁もと子が新しい事業を提案した萌芽期から
隆盛前期の時代に、散布図が「現場的」に動く。
つまり羽仁もと子の先導力が「現場的」-「教養
的」軸に影響する。

戦争の直前と、『友の会』が社会的活動を誌上で
大きく載せたとき、「公共的」に動く。戦争は記事
に大きく反映されるとともに、誌上に載る『友の
会』の活動は公共的である。

「普遍的」-「斬新的」軸は、羽仁もと子の存命
中に、極端に大きな変動を見せた。つまり、羽仁も
と子は誌面編集に大きな影響力を持つ。

6 『婦人友』誌の送り手と受け手の関係性の変遷

上述の内容分析結果にヒヤリング調査と文献調査
の結果を加え、各時代の特徴を以下にまとめる。

(1) 「友の会以前」

羽仁もと子は、創刊直後から、読者に「修養」と
して、読書や外に出ることを勧めていたが、それは
慰問や寄付を意味した。

『友の会』ができる以前の、創刊直後から読者を
集めて「読者会」や「読者組合」を結成するなど、
新しいことを試みている。また、悩みの聞き役も務

表2 数量化 類結果の固有値と寄与率

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.5485	21.23%	21.23%	0.7406
第2軸	0.3824	14.80%	36.02%	0.6184
第3軸	0.2755	10.66%	46.68%	0.5249

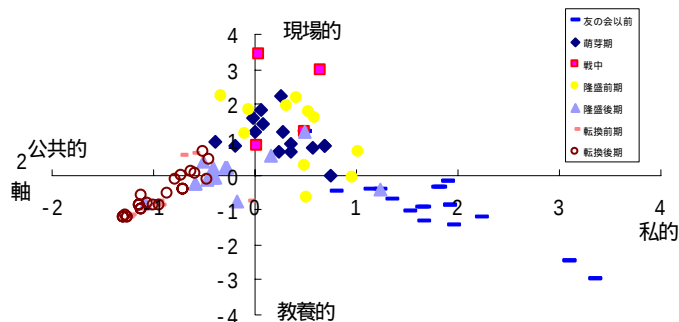


図1 各号特徴化のための散布図(1軸×2軸)

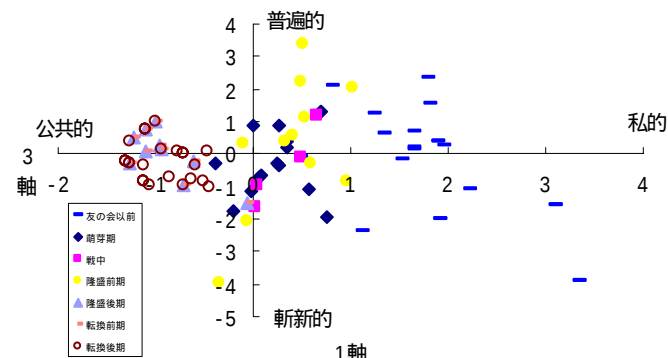


図2 各号特徴化のための散布図(1軸×3軸)

めている。

次の時代に『友の会』が次々生まれる様子から、
こうした試みによって、既に読者の共同体意識を作
りつつあったといえる。

(2)「萌芽期」

『友の会』ができたことで、会員は家の外での活動に関する記事を書くように変貌する。羽仁もと子の提案した「家庭生活合理化展」や「東北セトルメント」も、社会に目を向けるきっかけとなった。

一方で、羽仁もと子や男性執筆者による国内外情勢に関しては、読者の反応は誌上に現れなかった。関心の大半はまだ家の中のことであった。家事や家計を上手にこなす東京に住む富裕層の妻が、その理想像として誌上に頻りに現れる。

(3)「戦中」

羽仁もと子の戦争協力が声高に語られるが、『友の会』を含む読者の、反発はもちろん同調の様子も、誌面には現れていない。

全国大会の開催はなかったが、この頃東京近郊で開催されていた『友の会』主催の講習会案内は載せられていた。これにより、『友の会』では活動があったことと、時局を乗り切るための工夫を学びあっていったことがわかる。

(4)「隆盛前期」

羽仁もと子の提案する事業が最も多く、活発に行われていた時代である。

最も公共的な活動といえるのは「引揚者救済」である。しかしながら佐世保ではその公共性が認められるが、名古屋での事例では『友の会』の会員優先で救済しており、内輪優先の事業でもあったことがわかる。「グループ住宅」や「共同炊事」も、『友の会』内での提案であった。

会員は、戦前のように『友の会』が前面に出ることではないが、執筆者として、あるいは取材される側として、ごく自然に誌上に登場しはじめる。

この時代の読者の投稿の内容から、戦前に比べて、地域への問題意識や、自分の生き方を意識するようになってきていることがわかる。

(5)「隆盛後期」

羽仁もと子の死亡で新たな事業が提案されなくなる。政治や経済の記事が増加するが、これに反応したと思われる記事はなく、読者の関心は衣食住記事であった。座談会で語られることは、文化や結婚のことが多い。

この時代の終わりである1972(昭和47)年のボランティアの調査記事から、専業主婦の地域社会でのボランティア活動が一般的でなく、たとえあっても

その対象は老人であったことがわかる。

(6)「転換前期」

「公害」と「環境」の記事が増えてきたことで、前の時代の停滞ムードから脱する。また、座談会では平和問題が語られる。これらによって、読者の視線が少し社会に向けられた。

この時代も、『友の会』における目立った活動は行なわれないが、会員が順調に増えたことは、誌上に載らない定例的な講習会や展覧会が順調に行われていたことの現われであろうと考えられる。

(7)「転換後期」

散布図は前の時代とほとんど変わっていないが、誌面は分析に現れないところで大きな変化を見せている。羽仁もと子執筆文が後退し、『友の会』の活動がそのまま載ることはなく、一部が紹介される程度である。誌面はカラフルになり、若い女性を意識したものになってきている。

『友の会』では、環境保全に関する独自の取り組みが目立つようになってきている。『友の会』の会員減少という現状は、『婦人之友』誌からはわからない。

7 結論

7-1 『婦人之友』をめぐるシステム

『婦人之友』には、2つの目的があった。すなわち、雑誌を売るという一般的な目的(販促)と、羽仁もと子の思想を伝え続けるという目的である。売られなければ思想伝達ができないし、営利ばかりを狙っては羽仁もと子の思想が伝えられない。とくに『友の会』をどの程度誌上に載せるかなど、送り手の苦心が察せられる。

つまり受け手として一般読者(=個人受容者)と『友の会』(=共同体的受容者)の、2種類の受容者がいたことを考慮せねばならなかったのである。『友の会』が発足した当時は『友の会』を当然のように載せたが、読者層が高齢化したため若い読者拡大を図らねばならない。一般読者は『友の会』を知らない人も多い。そのため、近年誌面構成は若い読者を意識したものに変わってきている。

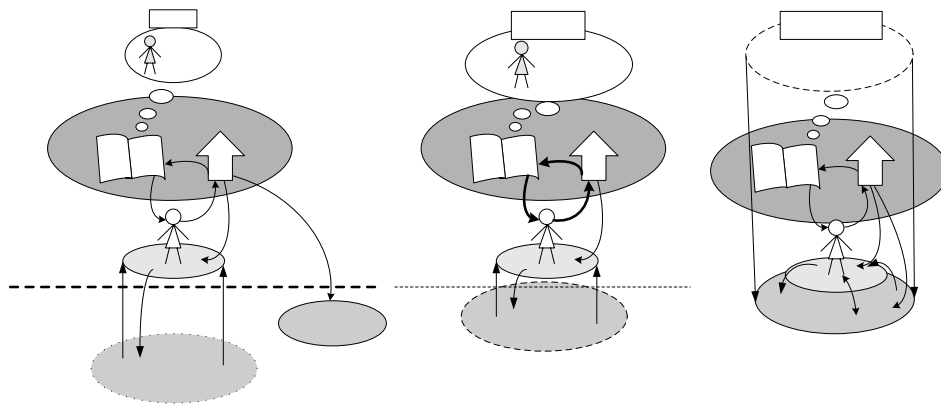


図3 『友の会』会員と地域の関係概念図

7-2 家庭生活の合理化

創刊当時は、『婦人友』誌は改良案を提示して、非合理的な家庭生活を合理的に変えてきた。羽仁もと子は、それにより捻出した時間とお金を、社会のために使えと訴えていた。この「社会のため」とは、慰問や寄付行為を意味していた。

戦前の東北セトルメントや戦後の農閑期衣食生活学校において、羽仁もと子は「貧しく汚く非合理的な彼らの生活を変えなければいけない」と主張したが、それは、当時の『友の会』会員の生活とはかけ離れたものであった。

やがて、日本の高度経済成長により家事時間は短縮してくる。しかし『友の会』では相変わらず家庭生活の研究が盛んである。そのうち『友の会』の活動時間も次第に増加し、やがて、『友の会』の活動のために家の中ことがおろそかになってしまうといった本末転倒な事態も発生してくる。

ところで、明治新政府の戸籍制度は、女性を「家内領域」に閉じ込める政策であった。そのため、近代女性史学では、「女性は家内領域、男性は公共領域」という二元論によって語られる。設立当初の受け手は、この「家内領域」に閉じ込められた存在であった。羽仁もと子による「家庭生活は質素に、社会は豊富に」するための「家庭生活の合理化」は、この家庭で生活研究に勤しむことが社会のためになるという斬新な考え方であり、衝撃を持って迎え入れたであろう。地域を見渡せば、人々はまだ無駄の多い非合理的な生活をしている。彼女らは、地域の非合理を誌上で嘆く。実は彼女らの住む地域も、羽仁もと子のいう「社会」の一部であるのだが、学んだことを地元地域に還元した様子はみられない。誌上に描かれる合理的な理想像の実現にむけて家事研究に励む。

やがて、女性の社会進出は、地域との不可避な関係性を生み出す。誌面は公共的な内容が次第に増えてくるが、

実際社会においてもローカリティは喪失されてきつつある。また、女性の社会進出は「家事の外部化」という現象も引き起こす。つまり、現代は「家庭生活の合理化」が必ずしも「社会の合理化」に繋がらなくなってしまったのだ。

7-3 結論

『婦人友』誌は、家内領域に閉じ込められた女性、とりわけ地域に対して疎外感を味わうことの多い都会に住む通勤族の妻たちに、「家庭生活の合理化」というメッセージによって、非合理的な地域と見切りをつけ、合理的な理想像を共に描き、更新させる役割を果たしてきた。その読者組織『友の会』は、全国に点在しながらもひとつの雑誌を共に受容する「共同体」としてひとつになれる「拠り所」として存在し、近年「社会の合理化」のため活動する組織に変貌しつつある。

¹ NPO 法人びいめ～る企画室

<http://www.bmail.gr.jp/>

² 岡満男：婦人雑誌ジャーナリズム、現代ジャーナリズム協会（1981）

³ 永嶺重敏：雑誌と読者の近代 オンデマンド版、日本エディタースクール出版部（2004）

⁴ 牟田和恵：戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性、新曜社（1996）

⁵ 小山静子：家庭の生成と女性の国民化、劉草書房（1999）

⁶ 前田愛：近代読者の成立、有精堂（1973）

⁷ 井上輝子：女性雑誌研究会：女性雑誌を解読する

Compareopolitan - 日・米・メキシコ比較研究、垣内出版（1989）

⁸ 上野千鶴子：近代家族の成立と終焉、p284、岩波書店（1994）

⁹ 天野正子：「つきあい」の戦後史 サークルネットワークの拓く地平、吉川弘文館（2005）

¹⁰ 佐藤慶幸他：女性たちの生活者運動 - 生活クラブを支える人びと -、マルジュ社（1995）他

¹¹ 本論文においては、読者組織が同属意識を持って雑誌の内容を「受容」し、それを土台に「研究」を行い「実践」という一連の過程を促す読書行為とする。

¹² 佐藤卓己：『キング』の時代、岩波書店（2002）

¹³ 阪本博志：雑誌『平凡』の時代と若者たち、出版社ニュース、3月号、pp6-9（2005）

理想像

グローバル
合理的

友の

モデル

研究

つきあい
学校

ローカル
非合理

羽仁もと子生存中